

第3回 第7次秋田市総合都市計画策定委員会議事要旨

- 開催の日時 令和2年3月18日(水) 午後2時から午後4時10分まで
- 開催の場所 秋田市職員研修棟2階 第1・第2研修室
- 委員の定数 18人
- 出席委員 13人
- 議 事 (1) 都市すべき都市の姿
(まちづくりの基本理念、まちづくりの目標、将来都市構造)
(2) 全体構想
(土地利用、交通体系)
- 審 議 日 程 1 開 会
2 委員長挨拶
3 前回(第2回)の会議で出された意見等への対応
4 議 事
5 その他
地域別まちづくりワークショップの実施方針について
6 閉 会

議 事 要 旨

1 前回（第2回）の会議で出された意見等への対応

事務局	説明（資料1）
質疑	（特になし）

2 議事

(1) 都市すべき都市の姿（まちづくりの基本理念、まちづくりの目標、将来都市構造）

事務局	説明（資料2）
-----	---------

委員	<p>目標が1から4まであったが、目標1と2の内容が重なる部分があると感じる。目標2に「快適で活力ある中心市街地と地域中心の形成」とあるが、目標1を達成しようとする、目標2も含まれてしまう。そのあたりを整理されたらと思う。</p>
----	---

様々な施策は重なる部分があり、それぞればらばらで実施するものではないと思う。例えば、拠点への住み替えといったときには、高齢者の話と中心市街地の話で重なる部分があるだろう。

目標が多ければ、より具体的でわかりやすいということもあるが、むしろ数を絞って整理したほうがわかりやすいのではないかと。

事務局	<p>ご指摘のとおり、目標1と2で重なる部分があるが、事務局案としては、目標1は市全体をみたうえで集約型都市構造を目指すというもので、目標2は都心・中心市街地や地域中心に特化したものとしている。</p>
-----	---

今後、全体構想や地域別構想、実現化方策まで検討していくが、その検討過程の中で、目標の集約も含め検討していきたい。

委員	<p>目標1の「持続的な成長・発展を支える都市構造の形成」という部分に引っかかっている。</p>
----	--

第7次秋田市総合都市計画の策定に至るまで、近代的な成長から人口減少へと進むべき道が変わってきたという認識でいるが、「成長」や「発展」という言葉を使用してしまうと、これまでと何が違うのかということになるので、慎重に言葉を選ぶべきだと思う。

ニュアンスとしては「成熟」のようなものをイメージしていても、言葉が「成長」や「発展」では捉え方が変わってしまうのではないかと。

また、目標1の内容で「持続可能な多核集約型の市街地」や「持続可能な公共交通」とあるが、持続可能であるべきなのは社会や市民の生活であって、そのために都市構造や公共交通をどうするのかという話なので、こういったヒエラルキーが伝わるような言葉を選んだほう

がよりわかりやすくなると思う。

目標3の「魅力ある都市環境を形成・育成」とあるが、「魅力」とは何なのか。ここでは、地域の特徴ある風景や歴史が魅力であるということだと思うが、そういったものが魅力であるということを明確に記載した方が伝わるのではないか。

事務局

目標1の「成長」や「発展」という言葉は、社会経済情勢と照らし合わせて適切なのかという点、ご指摘のとおりだと思うので、言葉を修正し、市民の方々にとってわかりやすい表現に心がけたい。

また目標3の「魅力」についても、具体のイメージがわかるよう表現を工夫したい。

委員長

総合都市計画は、第4次までは人口が増加するという前提に立った成長・発展型の計画であったが、第5次で大きく舵を切って、コンパクトな市街地ということを打ち出している。その時のシンボリックな言葉が「快適・環境都市」であった。第6次ではコンパクトな市街地というものを引き継いで、「持続可能な都市」というものを出した。

今回の第7次ではどうするかといったときに、「持続可能」だと同じ言葉だし、「成長」や「発展」では今までの考え方の慣性力がそのまままきまきしているという印象を受ける。悪いわけではないが、数値的・面積的なものを第一の価値観に置いてしまうと、成長・発展型の計画に逆行をしているというイメージになってしまう。どのような価値観を第一に考えるかということを検討しなければならない。

時代は明らかに変わってきており、この変曲点に対し、どちらのベクトルで意識していくべきなのか、今後検討していきたい。

委員

5ページにコンパクト・プラス・ネットワークを踏まえた集約型都市構造のイメージが描かれている。この図では、全て中心市街地を介さないと移動ができないイメージを受ける。各地域中心の良さを引き出し、全体が良くなっていくためには、各地域中心相互が連絡する姿になれば良いのではないかと思う。

7ページの目標3で、「多彩な資源」とあるが、なぜ「多様」ではなく「多彩」を使用したのか、理由を伺いたい。

12ページの拠点間連携交通網の形成について、例えば、地域の中での歩道や融雪、無電柱化のような回遊を促すようなものは、ここでは含まれないのか。含まれない場合は、どこで表現されるのか。

事務局

5ページのコンパクト・プラス・ネットワークの図であるが、交通の現状調査の結果をみると、各地域拠点から都心・中心市街地への人の流れが主な移動となっている。拠点間の移動がないわけではない

が、少ないのが現状であり、このような構造を基本に、今後土地利用や交通体系を検討していく必要があると考えていた。

拠点間の移動については、公共交通をどの程度のサービスレベルに設定するのかという議論はあるが、移動の大半を自動車に依存している状況の中で、基本的には、各地域中心と都心・中心市街地を結ぶネットワークを維持・強化することが第一であると考え、このようなイメージ図とした。

目標3は、自然というキーワードから「多彩」としたものであるが、どちらが適切な表現か検討したい。

地域内交通については、全体構想の交通体系や地域別構想の中で、各地域の交通のあり方を位置づけていきたい。

委員

5ページの交通に関しては、現状の交通体系がそうなっているため人の流れがそうなっているだけで、地域間の交流を生んでいない根本的な問題であると思っている。そこにしか交通がないことが課題であるという認識の基で、中心市街地を介さず、地域中心間を移動できるような姿を目指すべきではないかという意見である。

委員

中心市街地を介さないバス路線は、かなり採算性が悪い。目標として検討するのは良いが、市民に対し、過度に期待を与えるような絵姿を見せるのはやめていただきたい。

また、各地域を循環する路線網を検討するのであれば、バスではなく、もう少しコンパクトな、例えば、タクシーや地域の協働組織を活用するなど、ほかの交通手段についても考えていただきたい。

委員

この模式図はバスに限ったものではないと思う。

目指すべき将来の都市構造を表す模式図だとすれば、明らかに現状を肯定しているように見えてしまうことが問題だと感じる。

公共交通に関しては、どうしても秋田駅を介しないと利用できないという状況があるが、実際の勤務地は秋田市全域に広がっており、移動が制約されているということは事実としてある。形態はバスがいいのか、他の手段がいいのかということはあるが、自由に移動できるという姿をどのように目指すのかということが、一番重要なところではないか。

あまり現状を追従しすぎるのはよくないと思うのと、都心・中心市街地とざっくりと表現してしまっていることも様々な解釈を生んでわかりづらくなっている要因のようにも感じる。市民が誤解のないように示していくべきだと思う。

委員

6 ページで、各地域の拠点性の低下が懸念とあるが、現状として、各駅前住宅がなくなり、駐車場ばかりが増えている状況であり、なぜこのような現状なのかを考えずに、拠点への都市機能の誘導等を掲げても、綺麗な文言だけが並んでいるように思ってしまう。

今後、高齢化が更に進行したときに、市民が行くのは駅界隈よりも、総合病院になるかもしれない。将来のコア施設がどこになるのかということを考えて、現在から未来をみるのではなく、未来から現在をみていかなければ、対処的な都市計画になってしまうのではないか。

15 ページの既存ストックに関し、老朽化を踏まえた再整備とあり、外旭川の市場をイメージしているように感じるが、何とでも捉えられるような表現ではなく、交通体系も含め、秋田市の魅力をどのようにつくっていくのかをわかりやすい表現で示すことが重要だと思った。

事務局

拠点性の低下についてであるが、空き地等が多いエリアや高齢化率が高いエリアは旧来の市街地に多い。これは、人口が増加していた時代に、世帯数の増加や、一人あたりの自動車保有台数の増加など社会的な背景もあって、地価の低い郊外部に戸建て住宅が広がってきたことが要因であると捉えている。

拠点部への都市機能の誘導は、これまで長い時間をかけて集積したものを最大限生かすという視点から記載したものである。

既存ストックについては、施設によって状況は異なると考えている。行政も新たな社会基盤施設を整備することが困難な時代であるため、まずは有効活用を念頭に置きつつ、耐用年数の経過や、役割を終えたということがあれば、柔軟に対応する必要があるものと考えている。

委員

財政的な制約が高まることが予想されることから、負の遺産となるものはつくってもらいたくない。

エリアなかいちにある県立美術館も、耐震性がなく、新築するよりも改修の方が費用がかかるということで、新たに建築することとなった。しかしその後、旧県立美術館の建物を改修して新たな使い方をしようとしている。負の遺産をつくってもらいたくない。

委員長

負の遺産を残さないという視点は大変重要である。

個別の施策は部分最適ではあったかもしれないが、全体では不適合なケースが発生しているのではないかという指摘だと思う。

総合都市計画なので、教育など中身の議論はできないが、立地に関するものは総合的に考えて判断をしていくということがこの委員会の価値であろうと思うので、短期的な視野や部分的な視野だけで判断

すると負の遺産になりかねない。今後の議論に生かしていきたい。

委員

コンパクトシティは解釈が難しく、その実現には、都市によっていろいろなやり方があると思う。秋田市は「ネットワーク」を組み込んでいることが良い点だと思うが、議論の中でわかりづらさを生んでいる要因として、スケールの捉え方が大きすぎるのではないか。

現状、1/20,000 程度のスケールで捉えていると感じるが、概念図にある地域中心や都心・中心市街地は、鉄道が通った約100年前の都市構造とほぼ同じような形になっていると思う。今後、このまま人口減少が継続した際、その中で地域中心を捉え、それらをネットワークしていくということを考えていくと、おそらくこの概念図では大きすぎるものになると思う。1/20,000 の次に、例えば1/1,000 程度で地域を見ていくと、いろいろなことが見えてくる。都心・中心市街地や地域中心のようにコンパクトな市街地として成り立っているところではない、生活者の暮らすコミュニティの中心地や結節点が見えてくる。そういうところを界隈の中心として捉えて、これらも含めてネットワークしていくことにしていくと、クリアになっていくのではないかと思う。例えば、泉地区や山王地区、外旭川地区もあるので、こういった中間のスケールで都市を捉えていくことで、コンパクトシティという考え方がクリアになってくると思う。

そうなるとうちや雄和地域については、いわゆる交通網の中で、歩いて行くのではなく、離れの地区になってくるので、そこは大きなスケールの中での交通で繋ぐということになる。切り離して考えることが必要になってくる。地域の中での公共交通で移動可能な範囲、その中心地がどこなのかということ捉えていく必要があるのではないかと考えている。

事務局

まちづくりの計画を進めていくうえで、スケールの捉え方が重要というご指摘だと思うが、今回は、将来都市構造図ということで、市域全域から見た土地利用や交通体系のあり方の骨格となる部分を示している。

これから、全体構想や地域別構想とスケールが詳細になっていく中で、各地域別に検討していった際に、その中で中心となるのはどこなのか、土地利用や交通体系のあり方はどうあるべきなのかなど、意見を踏まえながら検討していきたい。

委員長

このような計画では、骨格的なものを仮に決めてブレイクダウンしていった詳細化を図っていき、一方で、地域の問題からボトムアップして、仮で設定した骨格で良いのかというチェックをするといった双方向の関係がある。ただし、ボトムアップから突き進んで整理しきれ

たというものはあまり例をみない。

全体を整理しなくてはならないという、ある種のフレームワークは必要になる。手順としては、理念や骨格の話をしつつ、その後検証をしていくということになるだろう。

委員

将来都市構造図では、大きな拠点しか位置づけられていないが、もう少し、中間のレイヤーを含めた拠点というものの位置づけ、そこをネットワークで繋ぐというような姿を示すと、鉄道中心の都市構造から、地域間の移動が可能となるような模式化が図られるのではないかと思っている。

(2) 全体構想（土地利用、交通体系）

事務局

説明（資料3）

委員

コンパクトシティを形成するうえで、地域の拠点に誘導が必要ということだが、河辺・雄和の地域中心にどのような役割を持たせるのか。河辺・雄和では、その周辺部や集落部から地域中心に人が来るということにはならないのではないか。

都市全体でスポンジ化を問題視し、人の誘導、コンパクトシティ形成を進めるのであれば、河辺・雄和はもっと違う位置づけにすべきなのではないか。

委員長

河辺・雄和の地域中心は、第6次では他の地域中心を同じように位置づけていたが、秋田市立地適正化計画では、他の地域中心とは違うだろうということで、位置づけを変えている。

その部分は進化しているのだが、具体的にどのような役割・位置づけなのかという意見だと思う。

事務局

河辺・雄和地域は、他地域と比べ、人口や都市機能の集積状況に差があるが、市町合併という歴史的背景や、行政機能が一定程度集積していることを踏まえ、地域中心としては残したいと考えている。しかし、単独では機能が不足している面もあることから、南部地域との連携を図りながら準地域中心のような位置づけを考えている。

委員

歴史的な背景や行政機能という意味では理解はする。

しかし、地域中心として位置づけるのであれば、そこに何をするかという話にもなるし、南部地域とバスで連携していれば大丈夫なのかということとそういうわけではないだろう。

行政サービスの拠点の一つとしては理解するが、生活サービス施設を含めた地域の拠点という位置づけには無理があるのではないかと。

委員

大きなスケールの中で、都心・中心市街地に次ぐ拠点として土崎や和田、妙法地区が出てくる。そういう意味では間違いではないのだろう。次のスケールでどのようにすべきなのかという議論になるのではないのか。

委員

筑波大学の谷口先生が、コンパクトシティがうまくいっていない理由として、拠点に集約するのではなく、拠点を集約するという発想が必要だということを行っている。

今までと同じような感覚を持ち続けて良いのかという議論は必要だと思うが、住民アンケート等の結果を見ても、拠点性は薄くなってきているものの、現時点では、まだ河辺・雄和の地域中心を拠点から落とすべき時期ではないと考える。

委員長

都市計画の運用を考えた場合、全体で合意が得られたとしても地域で合意が得られないということもある。ある種の政策合意がないと都市計画は運用できない。その部分のせめぎ合いの議論なのだと思う。

立地適正化計画では、各地域中心が同じではないということを出しており、地域の合意が得られれば次の段階に行くと思う。多段階で合意を得る必要があり、今は過渡期にあると捉えている。

委員

基本理念の中に、市民の関わりという部分が少し弱いように感じる。市民が当事者意識を持って、自分たちがどのようにまちづくりに関わっていくのかという部分をもう少し盛り込むべきと思う。アンケートやワークショップをやりましたということではなく、丁寧に住民に説明し、市民が選択をしながら納得して進めていけるようなものを盛り込んでいただきたい。

委員

資料2の16ページにあるエリアマネジメントによるまちづくりの展開は継続して取り組むべきものだと思っており、市民のまちづくりに対する参加意識を継続的に高めていく仕組みを担保していくことが必要であると思っている。資料記載の文面からは読み取れないがどのように考えているのか。もう少しわかりやすく記載してもらいたい。

事務局

取組の方向性を定めたうえ、今後、実現化方策を検討していく中で、関係部局と調整しながら具体的な事業等を位置づけていきたいと考えている。

表現についてはわかりやすいものとなるよう検討していきたい。

委員長

各種の地域課題の解決に向けた取組が増加しているということは
明るい状況で、第7次としてとても重要なことだと思っている。

例えば、空き地の活用などは、行政は先導的に数か所を取り組むこ
とはできるだろうが、実際には民間やNPOの話になってきて、重要
なのはどのように支援ができるのかということだろう。支援をする合
意をつくっていかないといけない。

エリアマネジメントについても、どういった支援の仕組みが取れる
かという部分については、第7次の中でもう少し解像度を上げて、行
政としてこんなことを展開していきたいということを位置づけられ
れば、非常に意味があると思っている。

委員

資料2の15ページの公共交通に関し、「市民・事業者・行政の協働
により検討」とあるが、どういった場で検討をする考えなのか。

また、既存ストックについて、一般建築物に対しても集約・撤去・
再整備を進めるとあるが、少し乱暴な表現に感じた。民間の施設に対
して、行政としてどのように進めていく考えなのか。

16ページの②で、「定住人口、交流人口、関係人口の拡大によりイ
ノベーションを誘発」とあるが、どういった意味なのか教えて欲しい。

事務局

公共交通については、対象としているのは基幹交通軸へのアクセス
なので、フィーダー的なものをイメージしており、地域の住民が主体
となって実施する生活交通をイメージしている。

既存ストックについてであるが、例えば、住宅や商店などの空き家
対策であれば、危険なものとは有効活用が可能なものと大別される。撤
去や再整備に対する行政支援を見据え記載していたものであるが、表
現については検討したい。

イノベーションの誘発に関しては、様々な交流が活発化すること
で、そこから新たなものが生まれていくという意図であるが、表現に
ついては検討したい。

委員

資料3の32ページの中で、歩行者・自転車利用環境の整備の中に
2つの考えが示されているが、秋田市の交通計画の中にコミュニティ
サイクルの記載があったと思うが、ここでは出てきていないので、記
載してもらいたい。

バス交通に関する「乗り継ぎ環境の改善」に関して、交通系ICカ
ードについても記載してもらいたい。

事務局	現時点では大まかな考え方や方向性であり、コミュニティサイクルやＩＣカードについては、交通体系の整備方針に記載するのか、実現化方策に記載するのかは検討させていただきたい。
委員	居住促進ゾーンは、立地適正化計画の誘導区域に該当するものか。
事務局	居住誘導区域と整合するものである。
委員	<p>立地適正化計画とのつながりが見えづらく、もう少し関連性がわかるようにした方が良いのではないかと思う。</p> <p>市街化区域への誘導とあり、その中でさらに居住誘導区域や都市機能誘導区域への誘導と表現はされているが、市街化区域への誘導では不足しており、もう少し踏み込んで、意図が伝わるように再検討して欲しい。</p> <p>理念の中に「暮らしの豊かさ」という言葉があったが、豊かな暮らしとは何なのかということがある。想定した暮らしの豊かさの具体的なイメージをどこかに記載すべきだと思う。こうするためにこんなことをやるんだということを記載するべきではないか。</p>
委員長	まちづくりの目標における「成長」や「発展」という議論と関連した部分。量的に整備すれば豊かだという時代は過ぎ去っており、では、豊かさとは何なのかという問いかけなのだと思う。今回の総合都市計画でどういった舵を切るのかということだと思う。
委員	人口が３０万人いるというのは東北では有数の都市である。量的なものは維持しながらも、今までと違った価値観を共有できれば良いなと思って、前向きな議論としてこの話を捉えてもらいたい。
委員	<p>交流人口は市外・地域間を指すのか。また、関係人口は市外のことなのか。また、それがどのようにイノベーションに繋がるのかがわかりづらかった。</p> <p>人口は増加しないため、交流人口や関係人口を増加させていく取組は必要であり、わかりやすく記載して欲しい。</p>
委員長	今回の会議では、資料にあった、浸水想定と今後の都市づくりについて議論できなかった。次回も引き続き議論を行いたい。

3 その他（地域別まちづくりワークショップの実施方針について）

事務局	説明（資料4）
委員	ワークショップは重要で、一般市民の方の意見をどのように集約していくのが難しいと思うが、具体的な方法について今のイメージがあれば教えていただきたい。
事務局	まずは、参加者が自由に意見を言えるような形で進めていきたいと考えている。テーブルファシリテーターは業務委託を行っているコンサルタントが実施することを想定している。 ワークショップの開催については、「つむぎすと」といって、官民連携に対して意識の高い方々にも情報提供しており、参加いただければ、議論が活発化してくるのではないかと期待している。
事務局	次回開催は6月を予定している。引き続き全体構想を議論していただく。欠席された委員は個別に説明し意見をいただく予定である。
委員	十分に議論できるよう、資料の説明は、特にポイントとなる点に絞ってもらいたい。
事務局	次回から意向を踏まえて対応させていただく。

これは、令和2年3月18日に開催された、第3回第7次秋田市総合都市計画策定委員会の議事要旨である。